

自然と生き物と私

なかむらひよし

ものごころついてから現在まで、私の身近に生き物（人間は別として、鳩、鶏、金魚、猫、犬、亀など）がいなかった時期はほとんどない。そして、幼児期から青年期までは東京郊外の自然に恵まれた環境のなかで過ごした。当時の私は全くの自然児だった。したがって、子ども時代のことを書くようにと

いわれれば、「三題噺」のような表題にならざるをえない。

コンピュータもなければテレビもないのだから部屋のなかでやることは、食事と寝ることと勉強くらいしかなかった。しかも、勉強らしい勉強をした記憶は中学の最終学年以前にはないのだから、結局は

学校と家の庭や周辺の野原とか田んぼのなかで暮らしていたらしい。このように、私が野生児になったのは、幼児期における父親の影響が大きかったように思う。父は、広島県の実業家の地主の次男坊で、その地域では、東京の大学まで了えた最初の人であつたらしいが、私同様自然人であつた。一応、小会社の重役でもあり、弁護士でもあつたのだが、休日には早朝から私を引き連れて、自宅前を流れている小川や田んぼに網とバケツを携えて出かけ、鮎や泥鰌をすくったりするのが好きだつた。私も小学校低学年頃は、一人で川に行き、ジャブジャブやっていたが、網に金色の腹をきらめかせた中型の鯉が捕れた時の感動の記憶はいまでも鮮明に残っている。

この父がどんな事情だつたか知らないが、庭の一隅にかなりの大きさの鳥小屋と金網を張つた鳥の運動場をこしらえ、最初は鳩を数十羽飼ひ始めた。私はこの鳩の飼育に夢中になつた。現代流にいえば、ハマツたのである。小学校の低学年の頃は、家に帰



ると、ランドセルを投げ出して、鳥小屋に入り、座り込んでひたすら鳩の生態観察に明け暮れていた。そして、ほとんどの鳩の個体識別ができるようになり、一羽一羽に名前までつけていた。その後、しばらくして、鳩はいなくなつて、数十羽の鶏にかつたので（いったい、わが父は当時なにを考えていたのか、私にはさっぱり分らないが）、今度は鶏の生態観察に打ち込んだ。その頃は鳩や鶏の顔と名前は識別できたのに、なぜか、長じて教師になつたら学生の顔が覚えられなくて、とくに、女子学生の顔は丸顔か細面かぐらいしかわからなくて、一年間私の演習に出席していた学生に次の年に「君、何年生」などと聞いてすっかり怒らせてしまったことも

ある。よくよく、人間には不向きにできているらしい。現在でも、本当は人間以外の生き物の心理のほうに興味があるので困っている。

小学校の頃は、姉が拾ってきた猫が二匹いた。最初にわが家にやってきた猫はメスだったが、素晴らしく伶俐で、とくに私によくついていた。しかし、メス猫は次々と子どもを生むので、子猫のもらい手を見つけるのが大変になったので、親猫を出入りの植木屋さんにあげることになった。私は涙ながらにそのことに反対したのだが、親の賛同がえられなかったので、猫を抱き締めて別れを惜しんだ。ところが、電車では三駅ぐらい離れた植木屋さんの家



から、十日ほどかけてわが家にその猫は帰ってきたのだ。それも夜私の部屋の雨戸のところまでニャーと鳴いて、開けてやった途端に私の足下に体をこすりつけた。もちろん、その晩は私がずっと抱いていてやった。かくして、その猫はわが家で天寿をまっとうした。一般に、猫は人目につかないところで死を迎える習性があるといわれていたが、この猫は冬、炬燵のそばで、私に体を静かに撫でて貰いながら、最後に一声、ニャーとかすかな声でないで、別れていった。

中学に私が進学した年に（昭和十二年）、中国との長い戦争が始まった。当時はこれを戦争とはいわずに「支那事変」と称していた。しかし、私の身の生活はさしたる影響を受けることもなく、わが家には今度は犬がきた。コリー種の子犬であったが、またまた、私はハマッてしまった。食事の世話や散歩の相手はもちろんのこと、庭で相撲や駆けっこまがいのことで一緒になって遊んでやっていた。もっ

とも、コッキー（この犬の名前）の方は、私の遊び相手になってやっているのだと思っていたのである。この犬は大型犬に成長し、町でも評判の美男犬であったが、晩年は、アメリカとの戦争（これも、当時は大東亜戦争で、正義のための聖戦であるといわれていた）の影響で食料難となり、われわれ人間ともども飢えの生活を強いられて、心臓病で卒然とこの世を去った。この頃は、私も中学を了えて、高校（旧制の高等学校）に進み（昭和十六年で、この年の暮れに真珠湾攻撃が行なわれたのである）、犬とたわむれてばかりもいられなくなっており、空腹を抱えて勤労働員とやらで、赤羽にあった陸軍兵器廠で弾丸の運搬などをやらされていた。それでも、コッキーの死にはショックを受け、もつとかれの体調などに気を配ってやっていたらと涙ながらに悲しい想いをしたことが、今でも思い出される。私に自然や生き物との触れ合いの楽しさを伝授してくれた父は、私が大学受験の準備に追われていた昭和十八



年の正月に腎臓癌のために亡くなった。戦争が激化して、高校も半年短縮になり、二年半で卒業ということだったので、もう半年頑張ってくれていれば、私の大学生姿（当時は詰め襟の金ボタンの服に、角帽であった）をみてもらえたのだが。この父もコッキーが大変自慢で、よくつれ歩いていたので、いまでも天国で一緒に歩いているであろう。

父の話ばかりでは片手落ちである。私が現在のようなほどほどの社会的立場と生活とを得ることができたのは、母の教育方針に依るところが大きい。今にして思えば、母はなかなかの教育ママであったらしい。子ども四人（兄二人、姉一人、私は末っ子）を幼稚園から旧制高等学校までの一貫教育を売り物

にしていた私立の学校に通わせ、家も学校に徒歩で通えるところに移し、そのため、生活は結構苦しかったらしいのだが、頑張り通したのである。出世欲のためにギスギスした人間になるよりも、人生にゆとりをもって対処できる人に育てたかったらしい。この思想が自然児の父とうまく調和したのである。父の死後、結婚生活より長い未亡人（この表現は、考えてみればひどい差別語で、いまだ死なない人というのだから、死ぬのを待たれているようなものだ）生活であったが、晩年はそれなりの社会的立場にいた息子三人の生活ぶりに安堵と自己満足もあったようである。ただ、姉が三人の女兒を残し



て、終戦後数年にして肺結核で死亡（明らかに戦争の犠牲）したのが悔やみ切れない想いとして残っていたようで、繰り返し思い出を語っていた。

私が小学校の低学年のころ、友人からお金を貰って（別に強迫したりイジメたりしたわけではないが）マンガの本を買ったことがあったらしいのだが、そのとき、椅子に座って私を膝に抱き上げて、涙を流しながらジュンジュンとそのことの非を語ってくれた。その内容は覚えていないのだが、ただ、母が本気で心配してくれているということだけは子どもごころにも理解できたようで、今でもその時の様子を思い起こすことができる。このように、生活や価値観への教育は厳しかったが、勉強をもっとしなさいと叱咤された記憶がない。とにかく、自然環境のなかでのんびりと遊び惚けていたのだから、学校の成績はさぞひどかったのだらうと思うが、私に對してはそっとわきから見守っていてくれたらしい。それでいながら、ときどきは、学校の先生に様

子は聞きに行っていたようで、一度だけ、先生から「お母様がいろいろ心配されているから、君もしつかりしなさい」というようなことを言われた記憶がある。

このようにのんびりしていても、落第しない程度には勉強もしていたらしいが、自分でも本気で勉強らしいことをした記憶は、中学の最終学年のとき大受験準備のとき、それと大学の最終年度の卒業論文作成のときぐらいである。高校時代は戦争の真っ最中であり、授業も戦時色が増していたが、出席にやかましくない授業はしばしばエスケープして、親しい友人数名と校庭の傍の田畑のあぜ道を散歩したり、レンゲ草のなかに憩って、時代や自己について語り合い、戦争中心の生活からの心の逃避を行っていた。このような自然への逃避も、わが父母の生活態度、価値観の影響であったのかもしれない。

「みつご（三鬼）の魂百まで」という言葉がある（ここで「三鬼」というのは双子とか五つ子など



と同じように、三人が同時に生まれた場合の「三つ子」のことを意味しているわけでもなく、ましてや「ダンゴ三兄弟」のことでもないから念の為)。幼少時に自然の豊かなところで成長し、魚や鳥や動物と仲良く暮らしていた経験は、成人後の私の生活に強い影響を及ぼしている。結婚後はほとんど鉄筋の集合住宅に住んでいるので、犬や猫は飼えないから、まずはベランダに水槽を置いて金魚を数匹飼いはじめた。この金魚たちが卵を産み、それが成魚となってまた子孫を増やして、一時は金魚が百匹を越えるほどになり、さすがの私もその世話に悲鳴を上げ、親戚や知人に無料配布をしたりした。このほか数十年來、亀の養育にうつつを抜かし、私を捜し求

めて、後をついて歩くまでに亀が馴れたことを自慢にして、とうとう、亀の本を二冊も書いてしまった。

自分が生き物を愛し、観察を続けただけでなく、娘二人の成長期には、近所の池に連れていって、ザリガニ（私の幼少時にはこんなグロテスクな生き物はいなかった）釣りの相手をしたり、学校の休みの時期には、危険のない範囲で、高原や海岸に家族旅行をしていた。自分が幼少時に体験した、自然の中の遊び、生き物を愛し生き物に愛されることの喜びを次の世代の子どもたちにも味合わせてやりたかったのである。娘たちの成長期は、私どもの育った時代とは価値観も社会制度も激変していたから、自然



のままの環境は減少し入学試験も厳しくなり、とても自然の中でのんびりというわけにはいかず、日曜ごとの塾通いなどがあり、可哀想だと思ったのだが、それでも現在の世相からみれば、彼女たちもずいぶん恵まれていたのだと思う。もつとも、このような感想を抱くこと自体が、実は、人間の生活には自然や生き物との交流が必要であり、人間性の基本にはそれを求める傾向があるのだという前提を、私が許容していることの現れであろう。しかし、自身の幼少時を冷静に振り返ると、あの時代だったから、あれでもなんとか社会から排除されず、落ちこぼれ扱いされないで成長できたのだが、現在のようばらに原子力と、コンピュータとテレビとが人間の価値観の根底を支配するような世相のもとでは、私のような子どもはその存在を抹消され、下手をすれば反社会的行動に走っているかもしれない。

文明と自然との関係をもう一度問い直してみた
い。
（元学習院大学）